

国際協力の現場を語る

JICA(独立行政法人 国際協力機構)は開発途上国の発展を支援するため、実務の経験と知識を持った人達を「JICA海外協力隊」として派遣しています。この人達は海外旅行などでの体験とは違った、海外協力隊ならではの様々な体験をしています。赴任国で体験した、生活、文化、人々との触れ合い、苦勞、喜び、伝えたいメッセージなどを熱く語っていただきます。

- ◆日 時：毎月第3水曜日 15時00分～16時45分
- ◆タイトル：シニアの挑戦!! 国際協力の現場を語る
- ◆会 場：JICA横浜(又は横浜市消費生活総合センター)、Web会議(Zoom)併用
- ◆主 催：NPO法人 シニアボランティア経験を活かす会 ◆協 力：JICA横浜
- ◆会 費：無 料(どなたでも自由に参加でき同時にZoomによるWeb会議も実施しますのでこちらへも参加できます)

会員以外の方でWeb会議への参加希望者は、
 1.氏名 2.メールアドレス 3.「体験発表会参加希望」を
 明記の上、以下へメールをお送りください。
 メール宛先：info@jicasvob.com
 Web会議に参加するための招待メールをお送りします。



赴任国(講演者)	「タイトル」	講演概要
第225回 10月16日 (水) 中国 (秀嶋 安城)		「中国の教師体験と中国の学校教育」 中国には「高考」というものがあり大学の統一試験がある。1071万人の学生が受験し国家重点大学100校が選ばれている。この試験が人生運命の分かれ道とも言われている。中国でよい仕事を得るには学士以上であり、名門大学の学位が必要とされている。よほど緻密な学力のある学生でなければ有名校に合格できないので「高考」を回避する為「留学」という道を選んでいる学生もいると聞く。
第226回 11月20日 (木) エチオピア (齋尾 恭子)		「エチオピア ハマラヤ大学生の食生活」 2008年エチオピア食生活調査を2回実施した。本報告はエチオピア東部にあるハマラヤ大学食品科学・技術科学生27名について、学校での食事、自宅での食事、行事との関連等々への解答・意見を分類・分析・検討した結果である。愛国短大紀要に、齋尾、間遠とキム(笹川アフリカ協会)、グレミュー(ハマラヤ大)の名前で報告した。調査結果におけるエチオピア若者の観点が興味深い。発表の最後の時間をいただき、今後、現在の海外協力隊派遣者へのSV会資料提供拡大案を提案したい。
第227回 12月18日 (水) ペルー (角井 信行)		「ペルーを救ったアルベルト・フジモリ」 自国の独立記念日と同日付に生まれ、米国同時テロと同日付に亡くなった人は滅多にいないだろうが、フジモリ元ペルー大統領はそれを満たした稀有の人物である。筆者のペルー勤務時、左翼テロと経済危機を乗り越え、隣国エクアドルとの国境紛争を収めた他、帰国後に起こった、日本大使公邸占拠事件を解決した誇るべき日系二世である。
第228回 1月15日 (水) カンボジア (宮本 晶夫)		「帰国後の交流活動について」 モンゴル・ウランバートル市とカンボジア・シエムリアップ市で、既存の下水道施設が良好な処理状況となるよう、お手伝いする活動を行いました。帰国してからも、派遣先等との関係を保ち、交流活動を継続したいと思っています。主に、帰国後の交流活動について報告させていただきます。
第229回 2月19日 (水) パキスタン (横溝 清子)	授業風景 	「日本語教育分野の活動」 2006年から2009年までパキスタンのカラチで、日本語教育の分野でSVの活動をして来ました。主な活動は現地の日本語教師に日本語教授法や教室活動の指導をすることでしたが、教材作成や弁論大会の指導などもしました。活動を中心に、体験したことをお話ししたいと思います。